

諸注意

この本は、コーラルの恵みがパチパチした感じの
アーマードコアVIのなんかです。

基本的に賽は投げられたルートに沿っていますが、原作の設定や時系列に厳密には準拠していない
部分があります。

とうぜん、ゲーム本編のネタバレを含みます。

奥付

「ルビコン食堂のババア」

著：perique

サークル：zealfahren

発行日：2023/12/31 C103

原作：AROMORED CORE VI

Mail：perique15@gmal.com

X：@perique_zero

Pixiv id：414674

表紙画像：stable diffusion 生成

「そいつがファーロンから来たって新入りかい」

「ああ。こいつが『ミシガン』だ」

ミシガンが「彼女」を間近に見たのはそれが初めてだった。ベイラムMT・AC混成部隊の鎧と硝煙の匂いが漂うハンガールの片隅、荷箱と防水布で区切られたその一角だけは、心地よく食欲をくすぐる食用油と炒めた野菜の匂いに満たされていた。地べたに、荷箱に、整備途中のMTに、思い思いに腰かけては食事をとっていた隊員たちが、一斉にメスティンから視線を上げてナイルが連れてきた新入りの顔を見る。その中でただ「彼女」だけは、ドラム缶を流用して作った急造ストーブのに向かったまま、燃え上がる炎の上で大きな鉄鍋をゆすっていた。

「まだなんか食えるもんあるかい、姐さん」

ナイルが陽気に新入りの肩をどやしつけながら尋ねる。傍らのミシガンはといえば、対照的な仏頂面のまま押し黙るばかりであった。

「待ってな」

女はストーブから鍋を下ろし、中身を二人分のメスティンに盛ると、ようやく二人の顔を見た。三角布で覆った白銀色の髪も、パイロットスーツを肌脱ぎにした上半身も、ストーブの中で燃え盛る炎の照り返しを受けて汗ばみ、火照っている。汗と戦塵とにすすけているが、まだその容色はかつての面影をとどめていた。

「……またひどくやられたねえ。何があったんだい」

「正式な着任も済ませないうちに本社の横やりで出撃命令が下ってな」

黙ったままのミシガンを親指で突きなが

ら、ナイルが言った。

「なんとか戻ってきた矢先、こいつがクソ役員の顔を美容整形してやるって言いだしてな。幹部食堂で大立ち回りさ」

「あんなところ行くから悪い。どうせまともなメシなんて出しゃないよ。本社の顔色うかがって、テーブルに置いた紙ナプキンの向きがそろってるか、なんてことばっか気にしてる連中さ」

目の周りにできたアザを気にして、顔を半分そむけているミシガンに向けて、女が湯気の立つメステインを突きつける。

「食いな」

「今日のメニューは何だい、姐さん」

「見てわからないならなんでもいいだろ」
アルミの角ばったメステインには、茶色くてどろりとしたものがなみなみと盛られていた。ミシガンはしばらくしかめ面をしたまま突っ立っていたが……やがて、その腹から周囲の一同に聞こえるほどの音が鳴った。

「さ、食いなよ」

女が笑った。

「よっぽど腹が減ってたんだねえ」

「あんたのメシが旨いのさ」

「世辞言っても大したもんは出ないよ」

呆れ半分の笑みを浮かべる女とナイルが見守る中で、ミシガンは料理を腹に詰め込んでいた。どろっとした煮込みのようなものがかかったコメ。見た目は茶色っぽく、何がやらわからないありさまだったが、快い匂いに誘われてスプーンで一口運ぶともう止まらなかった。

保存料くさいレーシヨンのとぼけた味とも、星間航行中の船で出される味気ないパック食とも違う。塩辛く、脂っぽく、それでいて疲れてささくれだった胃にしみわたる……優しい味。最後に口にしたのがいつもか思い出せない。本物の食材を使った、本物の料理。人間の食事だ。

「……旨かった」

メステインが空になると、ミシガンは手
の甲で口の周りを拭い、ようやく言葉を発
した。

「足りたかい」

「……何の料理か知らんが、味はまあま
あだ。見た目は素人臭いけどな」

「ああん？」

鷹揚な笑みを浮かべていた女が、その言
葉に眉を寄せる。次の瞬間、女は傍らに置か
れていた空のメステインを取り上げると、
振りかぶってミシガンに投げつけた。

「がっ」

「一言余計なんだよ」

綺麗な軌道を描いたメステインが狙いあ
やまたずミシガンの額を撃つ。もんどり
うつてのけぞるミシガンを、女はできの悪
い子供を咎める母親のような目で見つめて
いた。

「何しやがる……!」

「ははっ」

ナイルは座って自分のぶんの料理をほお

ぱりながら、女とミシガンのほうを和やか
な目で眺めていた。

「あの海賊ミシガンも形無しだな」

「覚えておきな」

腰に両手を当ててミシガンのほうに向き
なおると、女が相好を崩す。

「ウチじゃあ他人様の仕事に上から目線
で採点するだけの評論家野郎に居場所はな
い。そういうのは本社の椅子をケツで磨い
てる連中の仕事だ。あたしらの仕事はこっ
ち」

そういうと、女は肩越しに背後を親指で
指し示した。ハンガーに居並ぶMTの中央、
女の真後ろに、そこかしこの塗装が剥げた
サンドイエローの重量二脚ACがあった。

「改めて、あたしがYI、『黄河』だ。歓
迎するよ、ミシガン」

「……『ミシガン』、本日付けでベイラム・
イエローガンへの着任を申告いたします」

「楽にしてよし」

顔は不貞腐れたまま、直立不動の姿勢を

とつて敬礼するミシガンに短く答札すると、
黄河はナイルのほうに顔を向けた。

「で、その大立ち回り、向こうは何人いたんだい」

「こっちは俺とミシガン、向こうは例のクソ役員に、本社から来た警備部のごろつきが七、八人つてとこだな」

「やられっぱなしってわけじゃないだらうね」

「こいつが六人目をノシてきたところで俺が引き離してきた」

「よし」

黄河は深くうなずき、頭を覆っていた三角布を取った。背中まである銀灰色の髪が、はらりとほどけて炎を照り返す。

「口も態度も悪いが、根性は気に入った。何日か生き残ってくれば使い物になりそうだ」

「やるのか？」

「ああ。正式な着任報告前とはいえ、ウチの者が可愛がられたとあっちゃ捨て置けな

いからね」

ナイルはうなずき、急いでメステインに残った米とチャプスイを飲み込んだ。

「腹が膨れたら仕事だよ、ミシガン。O J Tで『ベイラムの流儀』ってやつを教えてやる」

不敵に笑う黄河の背後で、飯を食っていた男と（そして女）が、一斉に腰を上げる。

パイロット、整備員、後方支援要員。黄河が従えた男女はその数、半個中隊を数えたかどうか。誰もかれも一様に、不敵な笑みを口元にたたえていた。

『物量による圧倒』だ」

木星での戦闘は続いていた。常に企業間紛争の最前線にあつて、黄河の率いる部隊は戦果を挙げ続けていた。

欠けていく人員と装備の補充は常に遅れがちで、それはとりもなおさずパーツが交換容易で使い勝手の良いAC班が、使いべりのしない便利な戦力として駆り出され続

けることを意味していた。その中でミシガンもまた生き延び、撃墜マークを増やし続けた。

「なあ」

任務から帰還後、いつものようにハンターの片隅で鍋を振るう黄河の背中を見ながら、ミシガンは尋ねた。

「今更なんだが、なんでこの部隊ではあんたがメシを作るんだ？」

「……いつも真っ先に食いにくるくせによく言うよ」

「味見も俺の仕事のうちだ」

肩をすくめる黄河を尻目に、ミシガンは悪びれるそぶりもなくミールワームの肉団子を頬張っていた。

「そう決めた。給料分の仕事はしないと」

「……今日は何人死んだ」

「ティグリスとヴェイスワ、それとレナ」

二人の視線が、整備格納庫の中に櫛の歯が欠けるように空いた間隙を見る。帰って

きた機体もそこかしこの装甲が被弾痕で歪み、ゆがんだアクチュエーターの隙間から漏れ出した潤滑油が血を思わせる黒ずんだ染みを作っている。

「全員を全員、生きて帰すことはできないさ」

次の出撃に備えて、疲労困憊した体に鞭打ちながら損傷した機体の周囲で働く整備員たちを伏し目がちに見ながら、黄河は呟く。自分自身に言い聞かせているようにも聞こえた。

「だからせめて、死地に送る前にはまともなメシを食わせてやる。冷えたレーションじゃなく、ね。それをあたしは誇りにして」

「それはこの部隊でまともなメシを出す理由であって、あんたが台所に立つ理由じゃないだろう」

鍋のほうに向きなおる黄河の背中に、ミシガンは無作法にスプーンを突きつける。

「生きてるって感じるのさ」

「あんたが？」

「あたしがもともと大豊から来たって知ってるだろう」

「知ってるさ。そのころのあんたは何度も映像を見た」

女性だけで選ばされたACデモチーム「大豊娘々」の一員であった頃の黄河を、少年だったミシガンははつきりと覚えていた。ジネレータから排煙をたなびかせながら、自由自在に天を駆ける重量二脚の機体。地上に戻ったコクピットの中でヘルメットから豊かな銀髪を振りほどいてカメラに笑顔を向けるその姿。映像で、画像で、グラビア雑誌のページで、何度も何度も繰り返し見た。

「昔のあんたはもつと愛想よく見えたけどな。手首も足首も細っこくてすらつとして……」

「だから一言余計なんだよ。あんたは」
黄河は大豊娘々時代の話をしながらなかった。あえて話題にするものも、部隊の中

ではミシガンくらいだった。ACを降りてパイロットスーツからスリットの深いチャイナドレスに着替え、展示会にこやかに大豊製品を展示しながら惜しげもなくさらけ出していたあの脚線美。それがまだ若く血気盛んだったミシガンにどのような影響を及ぼしたかは黙っていたが。

「あたしが子供のころはね、まだ本格的にAC事業に手を出す前で……本場に町工場に毛が生えたようなところでさ。あたしはその工員たちの間で、昼には一緒に飯を作って食いながら、かわいがられて育ったのさ」

いつになく、過去を懐かしむような口ぶりだった。

「そのうち、あたしにはAC乗りの適性があるってわかって……こいつも強化人間手術を受ける前、ベイラムのパイロット訓練校に入るときに餞別だってもらったんだよ」

鉄のお玉で、かんかん鍋をたたたく。硬質

な金属の音が、がらんだのハンガーに響き渡る。

「どこに行っても暖かいメシにありつけるようにね」

黄河の口ぶりにはどこか自己憐憫がにじんでいる気がした。ミシガンは頬張ったミールワームの咀嚼に忙しいさまを装いながら、黙っていた。

「イエローガンはそのころ一緒に大豊から来た連中と一緒に立ち上げたんだ。今じゃあたしくらいしか残っちゃいないがね。同盟企業なんて言や聞こえはいいが、要するに使い勝手のいい捨て駒さ。あたしやあんたみたいな外様から来た連中を盾にして、本社の連中はエアコンの効いたオフィスでぬくぬくしてる」

「嫌ならやめればいい」

あえて、ミシガンは突き放したもの言いをした。信頼できる上官として付き従い、かつては憧憬の対象であった存在が——不意に見せた脆さを受け止めざるには、まだ若

すぎたのかもしれない。

「……あなたに迷いがあると俺が死ぬ。

迷惑だ」

「仕事はきちんとするさ」

黄河は白い髪をかき上げてうなじを見せると、うわべだけの笑みを浮かべて首筋を指先で軽く叩いた。

「こいつを外す金がたまるまではね」

「……再手術、受けるのか」

「年々副作用がきつくなってる」

なんでもない、とばかりに肩をすくめて、黄河は鍋の相手に戻った。その背中がミシガンにはどこか小さく見えた。

「……一番つらいのは、年々味がわからなくなることさ」

「やっぱり味見役が必要だな」

「今日はどうだい」

「まあまあ、だな」

「こいつ！」

ミシガンが軽口をたたくと黄河がものを投げつける。それはすでに部隊における、二

人の習わしになつていた。けれど黄河が放つてよこしたのは、何かキラキラした青いものだった。

「何だこりゃ」

「……やっぱりね」

とっさに反応して片手でこともなく投げつけられたものを受け止めたミシガンを、黄河は寂しさと愛情の混じつた笑みを浮かべながら眺めていた。

「生身のあんたにも今じゃ反応速度でかなわない。——潮時だよ」

「……勳章？」

ミシガンの手の中にあつたのは、深い青色の貴石がちりばめられた勳章だった。

「ベイルラム碧色勳章さ。あたしも見るのは初めてだが、結構いいもんだね。投げるによく飛ぶ。もつと安っぽいかと思つてたよ」

「俺にか？」

「あたしが申請しといた。『歩く地獄』『木星戦争の英雄』ミシガンにはそれでも足りないぐらいだが、あんたもいつまでもあた

しの下にいるタマじゃないだろう」

「俺だけの手柄じゃない」

「珍しく殊勝なことを言うじゃないか」

ミシガンの言葉は本心からのものだった。木星周辺宙域での戦争が続く中、ミシガンの撃墜数も、出撃回数も、部隊の中で群を抜いていた。部隊長である黄河を上回るほどに。

反比例するように黄河は出撃を減らし、基地で若い者たちの帰りを待つことが多くなっていた。しかし自分がガトリングガンを負いで暴れまわつていられるのは、背中を守ってくれるナイルと仲間たち、そして後背を固める黄河いてこそのことだと、ミシガンは自覚していた。

「ピカピカした安っぽいおもちゃだが、それがあれば社内でも箔が付く……コーラをめぐる争いはどのみちまだ終わらない。木星が片付いたら次はほかの恒星系にまで広がっていくはずさ」

「……ルビコンか」

「いいころあいだ。あんたも自分の部隊を構えな。ナイルにも話は通してある。イエローガンを引き継ごうなんてことは考えなくていい。こいつはあたしの代でしまいさ」
背後のハンガーで錆びた装甲をさらす黄色の愛機、その塗装のはげかけたエンブレムを見上げる目には、口ぶりとは裏腹に哀惜のようなものがこもっていた。

「あんた、ACを降りたらどうするんだ」
「お祝いも言わせちゃくれないのかい」
ミシガンのほうに向きなおりながら、黄河は肩をすくめる。

「何にも決めちゃいないよ。クニに帰って小さな食堂でも開くかね」

「……レッドガンだ」
「何だって？」

「俺の部隊だ。今そう決めた」
「そりゃあいい」

黄河はくしゃつとした笑いを浮かべる。
「バレルが赤熱して冷えることのない赤い銃。総長G1ミシガン。なかなか座りがいい

いじゃないか」

「なあ、黄河」
ミシガンは空になったメステインをわきによけると、正面からじつと黄河の顔を見

た。
「そのレッドガンにあんたの居場所を用意する。補給担当でもなんでもいい。一緒に来ないか」

「情けをかけてるつもりかい」
興ざめたように、黄河は目をすがめる。
「……そこまでの義理も未練もない。そうまでしてベイラムに残りたいとは思わないよ。だいたいACを降りたらあたしやメシを炊くしか能がない」

「それでもいい。勲章より、俺はあんたが欲しい」

真顔でミシガンは言った。
「……ミシガン？」

「俺はただ、あんたの作ったメシが食いたいだけさ。もうしばらくな」
「なんだい、そりゃ」

からからと、黄河が笑う。

「あんたの口からじゃなきゃ、もう少しロマンチックに聞こえたんだろうけどね」

ベイラム・レッドガンズ、補給担当副官付。それが彼女の正式な役職名だったが、誰も彼女を役職で呼ぶことはなかった。

常に食堂で立ち働きのながら、裏ではAC整備からトイレットペーパーに至るまで駐屯地の兵站業務のすべてに目を光らせる彼女を、あるものは敬意と畏怖をこめて「おぼちゃん」と呼び、口さがないものは親しみをこめて「食堂のババア」と呼んだ。木星から砂漠へ、水原へ、別の恒星系へと転戦するうち、パイロットも整備員も入れ替わっていったが、ババアだけは使い込んだ鉄鍋とともにいつでも食堂にいた。

食堂だけは、総長も副長も口出しできない彼女の聖域であり、それぞれに事情を抱えてレッドガンにやってくる若者たちにとっては口うるさくも心落ち着く、故郷の

代用品であった。

やがてババアの過去を知る古株もナイルとミシガンだけになり、新しく入ってきた者たちの間では彼女の名前さえも忘れられた。代わりに噂が好奇心を埋めていった。

曰く、木星時代にミシガンと肩を並べた古強者である。再手術を受けたもと強化人間である。ミシガンも頭が上がらぬ元上官である。総長を怒鳴りつけることのできる唯一の人間である。初代の大豊娘々である。

噂を口にするものが知らなかったのは、そのすべてが真実であったことだった。真偽について問われても、ミシガンは仏頂面に口を結んで押し黙り、ナイルは愉快そうに笑いながらはぐらかすばかりだった。

ひとつだけ、事実でない噂が流れたことがあった。ある隊員が総長と、い仲なのか、と無謀にも尋ねた時、ババアは大口を開けて笑い飛ばし、にべもなく否定した。あんなひよっこ、あたしの方から願ひ下げだよ、と。そしてコーラルをめぐる戦いが始まり、

レッドガンはルビコン進駐を命じられた。